
桜

kuro-kmd

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜

【Nコード】

N3428P

【作者名】

k u r o - k m d

【あらすじ】

桜の根元には屍体が埋まっている??そんなフレーズが似合う花の妖しさ。花の狂気を語るYと、それを見つめる「俺」の小話。

（前書き）

花の頃になるといつもそわそわするくせに、けして花見には行かない。いつからそうなったのか、もう覚えていない。

桜の根元には、屍体が埋まっている。

そう読んだのは何だったか、そう言ったのは誰だったか？。

美しいだけでなく、儚い。そして妖しい。

一気呵成に咲き誇る姿は、ある種のもの狂おしさを連想させるのかもしれない。

その勢いの滋養に、根方に骸を抱えていたとしても、致し方あるまいて？

さてこの花に、人を焚べたのは誰かしらと納得するのがせいぜい？

「ある夜さ、桜の名所である墓所にオートバイで行ったんだよね。オフロード車にタンDEMで。春先の空気って、あるじゃん？夜、全体が湿ってて、土中でなにもかもが蠢き出したっていうような、ぬるい空気。あれに侵されたような風になって、ふたりともシラフなのにテンション高くてさ。連れが曲乗りのようなことをはじめたわけよ。石段を昇ったり降りたり、トライアルのようなこと。トライアルってあれだよ、足着かずにすごい低速で、丸太とか渡っちゃうやつ。まあいいや。それでついに、前輪を高々と上げて（ウィリーね）、ベンチの上に乗ろうとしたわけ。ガッと前輪は掛かったけど、後輪がもうひとつのところで座面の縁にはじかれて、どういう案配だか、オートバイごとふっとんだ。それは見事に、宙をとんでいくのを、あたしは阿呆のように口を開けて、頭を傾げて追ってた。スピードが出てないから、グシャ、というようなコケ方で。

ざあっと急に桜が散って、巻き上げるような花びらの中で、連れはぼんやり地面に尻餅をついてた。ようやっと、自分もそっちに向かおうとしてゾットした。吹っ飛んでいった先に棒杭のように消火栓があつてさ。そこをめがけて落ちていたら、ほんの50センチず

れて、背骨やら顔面やらから飛んでいった日には、今頃どうなっていたのかとね。同じことを考えたらしい連れは、硬直したまま座り込んで。それを凍り付いたようになって見ていたら、そこへまた花びらがね、よくある絵のように渦を巻いて、吹き付けた。

よお、死に損ない。いっしょに洪笑が渦巻いてね。桜に引つ張られたような気がしたよ。」

そこでようやくＹは猪口の冷や酒を飲み干した。花見でもするかね。そう言つて誘い合つたはずなのに、いつもの地酒やで、いつもの田酒を飲みながらくだを巻いている。大酒飲みの耳元が、珍しくうつすら赭かつた。

「花見じゃないのか。こんな地下に潜つちまつてさ。」

穴蔵のような店内を見回して、Ｙはうすく笑つた。危ないじゃない。花なんか見に行かないよ。こうして満開の様を思えば、それで十分。

「そうか。たしかに危ないな。」

夜桜の下になど行つたら？何をしでかすやら。柔らかく束ねた手首の抵抗を想像する。身を擦つて、それから？

「何するかわかんないよ？」

「あ？お前が？」

こちらの妄想を見透かしたような言葉に意表をつかれた。そう、と澄ましてＹは空の片口を覗き込んだ。片手を上げると馴染みの店員が素早く反応する。飲ん兵衛に吞ますことにかけては、この店に敵うところを俺は知らない。

にこやかに、無言の店主がカウンターを出て来た。黙つて二合入りの新しい片口を置いていく。一枝、桜が添えられていた。

「へえ。粋なことするじゃん。」

Ｙは枝を取り上げて匂いを嗅ぐような仕草をし、香りがなから救われる、とぼそりと呟いた。それから一輪を取り、花びらをふたつの猪口に分けて落とした。

「乾杯。呑み込んでしまおう。桜に手を引かれたりしませんように。」

あいつとお前はいつ別れたんだっけ？あいつがラリーから戻らなかったのはいつだったっけ？ファラオリー、たしかアフリカだ。カンパはしたが、俺は壮行会に行けなかった。春じゃない。夏休み前だ。前倒しの日程が詰まっていた。

帰り道の上水のほとりを、俺は思い浮かべていた。その先の小道にも、桜の古木が枝を広げている。それら道々の誘惑を思い浮かべて辿りながら、花びらごと一気に干した。桜を呑み込んだYは、ほんの一時、蕩けるような目を宙に向けた。それからすぐに、いつもの鋭い真顔に戻ったが、上水でキスしてやろう。俺はもうそれしか考えていなかった。

（後書き）

他のものを書いている傍ら、息抜きというか手慰みに…師走になつたばかりなのに、なぜか桜の頃を思い出し、もの狂おしさを思い出し…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3428p/>

桜

2010年12月11日00時03分発行